

写真右／澄みきった音色で演奏を披露してくれた中央小学校の皆さん。



コンサート1番目の登場は、昨年初めて出演したアイランドバトンクラブのチームエンジェル皆さん。小学校低学年の女の子11名による「はっぴい夏祭り」、小学校高学年の女の子7名での「キラキラ」の演技、最後は中学生女子7名で「プロブレム」のバトン演技。空高く投げ上げたバトンを上手に受け止め踊る演技に、会場からは惜しみない拍手が沸き起こっていました。



写真上：チームエンジェル全員でのご挨拶。
写真下：北見工大&日本赤十字北海道看護大学吹奏楽部の皆さん。

2 番目には、市立中央小学校ブラスバンド部の児童13名。顧問の大坪先生の指揮で、「トライ・エヴリシング」、「ジャイアントキリング」、「ダンシングクイーン」の3曲を演奏してくださいました。

3 番目の演奏は、市立北中学校生徒35名による演奏。指揮は段城先生。「あまちゃん」、「ピースサイン」、「ドラえもん」、「明日も」、の4曲を披露してくださいました。

4 番目の演奏は、昨年中止となった北見工大&看護大の吹奏楽演奏。30名によるスイングジャズオーケストラスタイルでの演奏は、多くの観客から昨年の分までの拍手をいただいているようでした。来年もぜひコンサートに参加していただきたいものです。

5 番目の演奏は、社会人のグループ北見吹奏楽団26名の演奏。ラスト曲は「YMCA」。アンコール曲は、チームエンジェルバトンチームの参加もあり「ダンシングヒーロー」。生演奏を聴きながらバトン演技を見ると、観客も滅多にない離れ業を経験させられました。無事終了！



写真上：市立北中学校吹奏楽部の演奏風景。
写真下：アンコール曲「ダンシングヒーロー」の演奏と演舞。

写真下：北見吹奏楽団のみなさん。



素敵な来館者たち！



6月20日、札幌テレビ放送（STV）の人気番組「ブギウギ専務」のピアソン記念館への取材がありました。開道150年記念企画、「北海道に立つ銅像の人物の足跡やルーツを掘り下げる歴史探訪」で、幕末のヒーロー・坂本龍馬がテーマ！、龍馬の甥坂本直寛とピアソン宣教師の関係での取材でした。

7月4日、学校法人栗原学園のホテル観光ビジネス学科の生徒6名と3名の先生が来館されました。ピアソン記念館が北見の観光にどれほど貢献しているのかなど、熱心に質問をしノートに記録していました。栗原学園には情報通信科の生徒もおりますので、北見の観光情報を世界へ発信していただけたらと思います。

写真右／2階の「姉妹都市エリザベス市の展示室」で記念写真撮影。



ピアソン宣教師と坂本直寛牧師が旭川時代に十勝の監獄伝道をしてきた記録が多く残っておりますが、その記録によく登場する「三沢夫人」の子孫の方が来訪されました。ブラジルの上田ルイス牧師（この方が三沢夫人の直系の子孫）と奥様、上田氏のルーツ探しに協力されている神奈川県の石井浩ご夫妻です。百数十年前のルーツになりますので大変な作業ですが、熱心に調査をされておりました。遠軽地域には現在でも遠縁に当たる「三沢家」があるとお知らせしました。



写真左／後列左から、森下牧師、上田ルイス牧師、石井氏、河田事務局長。前列右より、吉田理事長、上田ルイス牧師夫人、石井夫人。

7月7日の午前、道立北見北高校の生徒92名が来館しました。ご存知の通り、北斗高校は戦前、北海道庁立野付牛中学校として、また、ピアソン夫妻がその生徒たちのための「ピアソン寮」という学生寮を設立・運営していたことをご承知と思います。

今回は、北斗高校A教諭の企画で、学校の歴史や生徒達の経費軽減のため寮を提供してくれていたピアソン夫妻を知るために学園祭の時間を割いての来館でした。はじめての訪問、そして初めて知った歴史を、考え深げに見入っていました。



写真右／自分たちが通う学校が、ピアソン記念館とゆかりがあることに驚き、展示物に見入る生徒達。

第18回文化サロンピアソン 「ラベンダーバンドルズ作り」

7月15日終了！

恒例となった、ピアソン会ハーブ部の教室が開催されました。

今回の教室は、生のラベンダーをリボンで結び、市松模様に編んでステック状にするものでした。

香りには心を落ち着かせる成分が含まれているため、大変好まれているものです。また、ラベンダーは殺菌や防虫効果もあり、製作した作品をタンスやバックに入れて使いたい、という受講者も。熱心に製作に励んで、時間が経過するのも気づかない様子でした。

写真左／作業台の上でラベンダー素材を包み込むリボンを編み込んでいる受講者。



ピアノン夫妻資料収集記 (2)



ピアノン会理事 玉置 義弘

ピアノンさんもアイダ・ゲップ夫人も自分たちの家族の事を、多くは語っていません。宣教活動に関係のない事ですから、語る必要もなかったでしょう。しかし今回の調査で二人の家族の事が多く分かりましたので、二人の家族について、今までに分かった事を書いてみたいと思います。

1、ピアノン宣教師の家族

まずピアノン宣教師の両親についてですが、父のデイヴィッド (David H Pierson 1818 ~ 1889) と母のキャロリン (Caroline Peck 1821 ~ 1902) は1844年9月23日に結婚しています。そしてピアノン宣教師を含め6人の子供が生まれましたが、最初の子供ヘンリー (Henry M Pierson 1846 ~ 1852) は、わずか5歳ほどで亡くなって

家を継いだ事になっています。また兄弟の職業ですが、ジェームスは食料品店を営み、デイヴィッドは銀行員と記録ではなっています。マリリーは家事手伝い。キャロリンの夫、ビゲローは卸売商を営んでいました。

2、アイダ・ゲップの家族

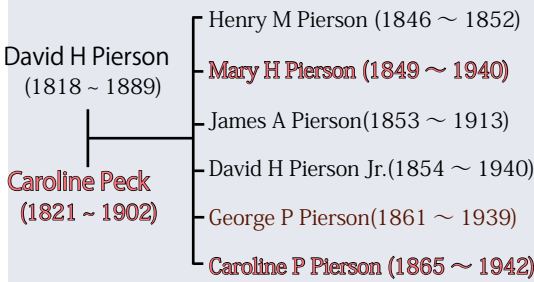
アイダ・ゲップの家族についての記録は多く残されており、かなり最近の記録まで辿ることが出来ます。アイダ・ゲップは1862年にチャールズ (Charles P H Goeppe 1827~1907) とマーサ (Martha Neale Cowpland Goeppe 1833~1870) の長女としてフィラデルフィアで生まれました。父親は弁護士でしたが、かなり積極的に政治活動に関わっていたことが、会員の北原俊之氏からの情報でわかりました。兄弟はフィリップ (Philip Henry Goeppe 1864~1936) とルドルフ (Rudolph Maximilian Goeppe 1866、不詳) の二人の弟があり、弟達もアイダ・ゲップと同じく、実母の死後、ドイツに住む叔母の所で育ち、高校を卒業後にアメリカに戻りフィリップは音楽家として、ルドルフは医師として

フィラデルフィアで共に活躍した事が多くの記録に残っています。今までピアノン宣教師はアイダ・ゲップの「兄」のルドルフのもとで亡くな

った(小池創造著「田舎伝道者」とされてきました)が、今回の調査でルドルフは「弟」だったことが確認されました。さらに父親のチャールズはマーサの死後、キャサリン (Katherine M Silk 1853~1934) と再婚。アイダ・ゲップと二人の弟にとつて、3人の弟と2人の妹が生まれています。

この兄弟についての詳細は割愛しますが、再婚相手が娘のアイダ・ゲップと9歳しか違わないことに少し驚きました。今回は、アイダ・ゲップの弟フィリップとルドルフについて詳しく書きたいと思っています。

ピアノン家の家族構成



ピアノン会顧問のハード氏が、6月29日にニュージーランドから来北されました。有志で夕食会を開催し歓迎致しました。(写真は7月2日午後、JR北見駅で見送りをした時のもの)

編集後記

北海道遺産協議会へ助成金申請をしていましたが、7月10日付で交付の決定が届きました。誠にありがたいことです。助成金を活用しピアノン夫妻が遺した貴重な資料を多くの方々に読んでいただくようにしたいと思っております。

玉置理事の連載が二回目となりました。今回はピアノン夫妻の家族のことが紹介されています。親族の系譜が現在まで続くのか。期待したいです。

ホームページを更新しましたが、「行事報告&素敵な来館者」のページを新たに設けました。今回はグリーンコンサートや来館者の報告を掲載しています。今後とも毎月の更新を継続しながら、色々な報告や紹介をホームページ上でもしていきたいと思えます。会員の皆様もホームページへの要望がありましたらご連絡ください。

(理事兼事務局長) 伊藤 悟